検証 文革半世紀

中国の未来は—専門家座談会

中国で文化大革命（文革）が始まって50年となる今年、産経新聞は５月から12月まで「検証　文革半世紀」と題して長期連載を掲載した。連載終了に合わせて開いた座談会では、中国問題の専門家と担当記者が「文革と中国の将来」について意見を交わした。

（司会　外信部長　渡辺浩生）

残る傷 居座る指導部

共産党に国民不信も民主化遠く

人民の上に唯一神

——文化大革命とはどういう政治運動だったのか

石　始まったのは私が4歳の時だった。両親は集団農場に下放され、私は農村の祖父の家に預けられた。父親は大学で物理学を教えていたが、農場で8年間、養豚の仕事をさせられた。後に、「物理学は半分以上忘れたが、豚のことにはとても詳しくなった」と聞いたのが印象的だった。

両親の世代にとっては暗黒の時代だったが、子供だった私の目には実に単純明快な社会だった。世の中には人民と敵の2種類の人間しかいない。人民の上に唯一の神である毛沢東がいる。毛の言うことだけを信じればよかった。悩みの少ない少年時代を送っていたといえるかもしれない。

矢板　当局を恐れる気質は昔とあまり変わらない。文革の体験者への取材で、「記事にする際、名前を出してもいいか」と尋ねると、100人中9割が「家族がいるので勘弁してくれ」「名前が外国の新聞に出たら、公務員の子供に迷惑をかけるかもしれない」といった反応だった。文革は、中国人にとって[illegible]

[illegible]

毛沢東の政治利用

[illegible]

なお続く"文革"

[illegible]

米中対決の時代

[illegible]

中国の建国後の主な歩み

年	月	
1949	10	中華人民共和国成立
50	10	朝鮮戦争に参入
57		毛沢東が共産党に批判的な知識人らを摘発する反右派闘争を発動
58		農工業生産の増大を図る大躍進運動。経済の混乱と食料不足で多数の犠牲者
59	4	大躍進運動の失敗などで毛沢東が国家主席辞任、後任に劉少奇
69	3	ダマンスキー島（中国名・珍宝島）の領有権をめぐり、ソ連と軍事衝突
72	2	米大統領ニクソンが訪中
	9	日本と国交正常化
78	12	党11期3中総会で改革開放路線へ転換
79	1	米国と国交正常化
	2	ベトナムに侵攻（中越戦争）
81	1	四人組裁判判決、毛の妻、江青ら[illegible]
	6	文革を全面否定する決議採択
87	1	胡耀邦総書記が失脚
89	6	第2次天安門事件、趙紫陽総書記が失脚
92	1～2	鄧小平が南部の都市を視察し、改革開放路線の加速を呼びかける（南巡講話）
97	7	香港の主権が英国から返還される
2001	12	世界貿易機関（WTO）に加盟
15	12	中国主導のアジアインフラ投資銀行（AIIB）が発足
16	7	オランダ・ハーグの仲裁裁判所が南シナ海における中国の主権主張を全面否定

文化大革命

年	月	
1966	5	中国共産党中央政治局拡大会議で、毛沢東がブルジョワ階級代表の批判を呼びかけた「5・16通知」を採択、文革が本格発動
	8	共産党8期11中総会で、「資本主義の道を歩む実権派」打倒を掲げた「プロレタリア文化大革命に関する決定」採択
		毛沢東、天安門で初の紅衛兵接見
67	4	戚本禹が論文「愛国主義か売国主義か」で劉少奇批判
68	2	人民日報が鄧小平への批判開始、公職を解任
	7	毛沢東、北京の紅衛兵代表に武闘停止を指示
	10	党8期12中総会で劉少奇の党除名を決定
	12	毛沢東、若者の農村での再教育を指示
69	11	劉少奇が死去（1980年に公表）
70	8	党9期2中総会で毛沢東と林彪が対立
71	9	林彪がクーデター計画、ソ連に逃亡中モンゴルで墜落死
74	1	江青ら「四人組」が「批林批孔運動」を本格化、周恩来を攻撃
75	11	毛沢東が鄧小平批判
76	1	周恩来死去、首相代行に華国鋒
	4	第1次天安門事件で鄧小平失脚、華国鋒が首相就任
	9	毛沢東が死去
	10	「四人組」逮捕、華国鋒が党主席就任
77	7	共産党10期3中総会で鄧小平が復権
	8	第11回党大会で華国鋒が文革終結を宣言

中国　建国以来の5人の指導者

毛沢東
鄧小平
江沢民
胡錦濤
習近平

中国建国の父。1981年の中国共産党11期6中総会の「歴史決議」で、「文革で重大な誤りを犯したが、功績は誤りをはるかに上回る」と総括された

3度の失脚を経て、最高実力者となり、経済の改革開放路線を推進。89年の天安門事件では人民解放軍による学生らの武力弾圧を決断したとされる

中国共産党は、①先進的生産力の発展②先進的文化の前進③広範な人民の根本的利益を代表するという「3つの代表」論を打ち出し、私営企業主の入党を容認

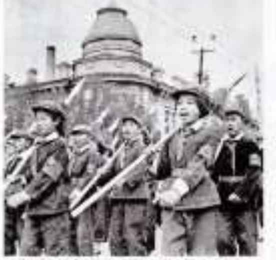
中国共産主義青年団出身。格差の是正や環境にも配慮した持続的な発展を目指す「科学的発展観」を指導方針として打ち出す

元副首相の父を持つ「太子党」。「中華民族の偉大な復興」をスローガンに掲げる。汚職官僚らを取り締まる反腐敗キャンペーンに力を入れる

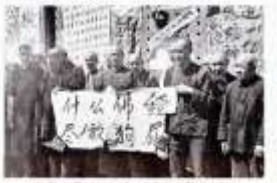
命懸けのフィルム

連載でも紹介した中国紙「黒竜江日報」の元カメラマン、李振盛氏が文革中に撮影した未発表の写真の一部を紹介する。

目の前で次々と展開される残酷な批判大会や闘争、毛沢東への個人崇拝の異様さなどに圧倒され、シャッターを押し続けた。文革の負の材料を集めたことが分かれば命が危ないと知りながら、約10万枚のネガを自宅の床下に隠した。一連の写真は後に文革の全体像を伝える上で貴重な資料として高く評価された。

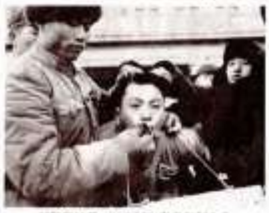


1966年10月1日、手製のやりを掲げ、毛沢東をたたえる歌を歌いながら行進する黒竜江省の「紅小兵」（紅衛兵の小学生版）



1966年8月、ハルビン市内の寺院で、紅衛兵に「仏典などはしょせん犬の屁だ」と書かれた紙を持たされ、批判される僧侶たち

1966年7月、黒竜江省で行われた水泳大会で、入水前に全員で毛沢東語録を読む選手たち



1968年11月、ハルビン市の批判大会で、声を出して叫ぶことを阻止するため口の中に軍手を詰め込まれる男性

評論家・拓殖大学客員教授　石平氏

せき・へい　1962年中国四川省生まれ。北京大学哲学科卒業。88年、留学のため来日し神戸大学大学院文化学研究科博士課程を修了。2007年に日本国籍を取得した。著書に『なぜ中国人は日本人を憎むのか』（PHP研究所）など多数。

学習院女子大学国際文化交流学部准教授　金野純氏

こんの・じゅん　1975年岩手県生まれ。一橋大学大学院社会学研究科博士課程修了。社会学博士。著書に『中国社会と大衆動員—毛沢東時代の政治権力と民衆』（御茶の水書房）や、『文革—南京大学14人の証言』（築地書館、共著）など。

東京大学大学院総合文化研究科准教授　阿古智子氏

あこ・ともこ　1971年大阪府生まれ。大阪外国語大学卒、香港大学教育学系で博士号取得。在中国日本大使館専門調査員、早稲田大学国際教養学術院准教授などを経て2013年より現職。著書に『貧者を喰らう国　中国格差社会からの警告』（新潮社）など。

産経新聞外信部編集委員　矢板明夫

（野村成次撮影）

やいた・あきお　1972年中国・天津市生まれ。15歳の時に日本人残留孤児2世として千葉県に引き揚げ。慶応大[illegible]松下政経塾を経て2002年に産経新聞入社。07年4月から16年11月まで北京に駐在。著書に『習近平　なぜ暴走するのか』（文芸春秋）など。

文化大革命（1966～76年）　中国共産党主席、毛沢東が発動した権力闘争。古い文化を破壊し、理想社会を目指すとのスローガンで大衆を動員し、共産党の古参幹部や知識人を迫害、全国が大混乱に陥った。犠牲者は少なくとも100万人に上り、何らかの迫害を受けた人は１億人ともいわれる。81年の党中央総会で「災難をもたらした内乱」とされた。

連載を終えて

体験者全員が被害者だった

北京郊外にある毛沢東の妻、江青の墓を約3年前に訪れた。文化大革命（文革）推進派として大きな権勢を振るった後に失脚したにもかかわらず、その墓は支持者の献花に囲まれ、「万国の労働者よ、団結せよ！」といった文革時代のスローガンも掲げられていた。「あれほど悲惨な歴史なのに、その時代を懐かしむ人がなぜ、こんなに多いのか」。この疑問を解きたいと思い、書物を読みあさって取材を始め、全28回の連載として結実した。

100人以上の文革体験者から話を聞いた。迫害された知識人などは最初、「もう忘れたよ」といった反応を示したが、話を聞いているうちに感情が高ぶり、最後には泣き崩れる人もいた。言いたいことは山ほどあるのに、彼らは普段、悲惨な記憶を封印していた。批判大会でつるし上げられた古参幹部だけではなく、教師に暴行した紅衛兵にも、その後の人生で辛酸をなめた人が多い。文革で得した人は誰もおらず、みなが被害者だった。

個人崇拝など、さまざまな文革的現象が現代中国に戻ってきたのは、共産党政権が自らの負の歴史を封印し、文革を推進した毛沢東を否定しなかったことにあるのではないか。それが私がたどり着いた結論だ。現在の最高指導者、紅衛兵世代の習近平自身が毛沢東に憧れ、毛のような指導者になりたいと考えていることも、大きな原因かもしれない。（矢板明夫）